

新時代の幕開け 飛躍への決意

【新年を迎えて】
社長・役員より挨拶



追憶

今井幹文前社長が私たちに遺してくれたもの

改革とともに歩んだ軌跡

今井幹文前代表取締役社長が、2018年9月25日に逝去されました。

平成5年の就任以来25年にわたり多方面で手腕を発揮され、当社を力強く牽引してくださった、前社長。中でも、特に深く私たちの心に刻まれている

- 財務体質の改善
 - 人材育成
 - 中期経営計画
 - 設備投資・グループウェア導入
- の4つに焦点を当て、その功績を振り返ります。



財務体質の改善

財務の見直しが近代化への第一歩 ドラスティックな改革で財務体質を強化

近代化に向けて、今井前社長がまず着手したのは財務の見直しです。いつしか230億円に膨れ上がった当社の借入金金は、土地を担保にしたものでした。そのため、バブル崩壊後の地価暴落による損失を覚悟の上で、平成14年頃から関連会社の統合や遊休不動産の処理に取り組みます。平成16年には借入金100億円未満を目標とし、手形流動化によるオフバランス、在庫削減、現金回収化を試み、キャッシュフローの改善に努めました。その後も、平成17年に私募債発行、平成19年にシンジケートローン利用、銀行とのコミットメントライオン契約など、様々な対策を講じて対外信用力と財務体質を強化。その結果、借入金金は80億円を切るまでに至りました。さらに平成20年から監査法人による監査を受け入れ、事業運営の透明性を高めることにも努めました。

人材育成

人材力の結集で会社を動かす時代へ スムーズな世代交代を 為し得た伝説の研修

トップダウンで物事を進めることができた昭和の時代から、テクノロジーの進化やグローバル化の進行により、かつてないほど不確実性が高まる平成の時代へ、そこで必要とされたのは、社員の主体性ある行動を結集し、会社を動かしていく体制へのシフトです。そのためには人材育成こそ重要であると考えた前社長は、平成12年から大手コンサルディング会社「ヒューマンリンク」による研修を開始しました。まずは幹部を集め、泊まり込みで様々な課題を議論します。講師は的確かつ辛辣で、中には指摘されたことに反論できず、圧倒される人もいました。それを継続することで、先見性や影響力を持つ人物が自然と抽出されました。平成19年には30代の部長職が誕生するなど、年功ではないスムーズな世代交代が実現しています。



社員の意識向上と、 評価する目を養う試み

平成14年には新人事制度を策定し、職級とそこで期待される役割を明確にしました。さらに、平成22年には新目標管理制度、平成25年には階層別の人材育成プログラムを定め、研修制度を整備するなどして、次世代を担う人材づくりを推し進めました。

また当社独自の海外研修として、平成20年には上海、平成26年にはバンコクへ社員を派遣し、現地の鉄鋼メーカーや、そこに進出する日本企業の見学を実施しました。中堅社員に世界や業界の動向を体感してもらうことで、意識の向上を促しています。

さらに、社員の厚生を目的とした取り組みも行っています。5年ごとに全社旅行を企画し、創業百十周年には香港、グアム、台湾へ。百二十周年は東日本大震災の復興を支援する意味を込め、福島を訪れました。



中期経営計画

藤田の将来像を ともに描き推進する 新たな価値を創る、 中長期経営計画スタート

会社の将来像を社員自ら考え、つくり出す。多様な変化の先にあるものへ常に意識を向け、新しい価値を創造し続ける。

それを目的とした取り組みが、先の人材育成と、平成17年に始まった中期経営計画の策定です。事業部ごとに幹部、中堅、若手社員が意見を交わしながら会社の将来像を導き出し、それによつてつくり上げた中長期の戦略を行動の指針にします。前社長は、自らを描いたビジョンをもとに、様々な階層の社員が参画し、組織的に価値を生み出していくサイクルと仕組みを構築したのです。

強みを生かし、 プレゼンスの向上を 目指す

平成28年、4回目となる中期経営計画を定め、「動く変る 既成を破り新たな価値と領域をつかむ」というスローガンのもと、「新たな事業領域」「既存事業の深化」「人材戦略」の3つの基本方針を打ち出しました。これに伴い、過去の踏襲に未来はない、新たな事業領域に進むことが必要であるという意識を全社で共有しています。

具体的な施策としては、加工領域の拡大を目的とした機能の拡充とネットワークの構築、鉄のプロとなる人材の育成、そして次世代の柱となり得る新事業の確立です。同時に、事業部を超えた連携により、既存事業を深化させることも不可欠です。前社長は確信していました。「それらの実現により、藤田のプレゼンスは格段に上がる。他社とは違う利便性、優位性をさらに決定づけるだろう」と。

多品種の取り扱いと東日本全域での事業展開は、経営の安定を支える当社

の強みです。浮き沈みの激しい鉄鋼業界において、120余年にわたり厚い信頼を築いてきた要因は、経済環境の変化にも柔軟に対応できる体制づくりの成功に他ならないでしょう。



設備投資・グループウェア導入

効率化を図る 多様な取り組み

設備の更新が 発展への足がかりに

平成5年、現在の燕市蔵関に燕支店を建設し、工場および事務所を移転。「ステレンスは伸びしろのある成長分野である」との確信を強めた当社において、今井前社長は設備室長であった当時からの計画に携わり、社長就任と同じ年、建設・移転が実現しました。その後平成12年には、燕工場にフープ収納自動ラックを設置。格段の収納力と安全性、作業の効率化を叶えました。

一方、三条支店では、平成18年にICTタグによる母材在庫管理システムを導入し、効率化や安全性アップに加え、異材混入防止やコスト低減に成功。現在は東北コイルセンターでも

同様のシステムを取り入れています。平成20年には、三条支店で大型レベラーのリプレイスも実施しました。

厚板・形鋼部では、平成9年、新潟・県央にレーザーセンターを開設し、レーザーへの積極投資を進めました。現在までに導入されたレーザー加工機は15台。今日では6台が稼働しており、うち秋田と新潟には最新のファイバーレーザーを設置。品質が求められる製品への対応力を確立しています。平成20年には、新潟鋼板センターに製缶部門を開設。組立加工に取り組み、最終製品の納入実績を築いています。

その後も、平成24年には穴開け機・開先加工機を増設し、一貫加工体制を構築。平成28年には当社初のベンダー機を新潟のレーザーセンターに新設するなど、加工領域拡大への挑戦は脈々と続いています。



高度な情報共有を叶える グループウェア導入

いち早くIT化に取り組んでいた当社は、平成9年、グループウェアを導入。独自のカスタマイズにより、営業や経理の情報、人事総務の連絡など、様々な情報の共有を高度に実現しました。それだけでなく、安全小集団活動の活性化や与信情報の発信など、中期経営計画に掲げた戦略・戦術を円滑に進めるためのツールとしても価値を發揮。社員が意見を交換し、方向性を同じくするための場としても機能しています。

お別れの会

お別れの会は11月12日、ホテル日航新潟4階の朱鷺の間で執り行われました。



「今日はちょうど四十九日。故人が来世に旅立つ日であり、皆さんも父と一緒に仕事をすする最後の日となる。父も見ていると思うので、献花に来てくださる方へ最大のおもてなしをお願いしたい。」

今井幹大新社長からの会の運営に集まった社員への挨拶が始まりました。

会場の前方には白を基調とした祭壇が飾られ、約1400名の方から献花にご来臨いただきました。また、会場外に設置されたメモリアルコーナーには前社長の幼少期からの写真が飾られ、ご来臨の方が前社長の早すぎる旅立ちを惜しんでいらつしやいました。



コミュニケーションを 原動力に 自ら「変る」勇気を

代表取締役社長
今井 幹太
MOTOHIRO IMAI



私が大事にしたいこと

中期経営計画の途中で社長を引き継いだということで、今期中計に沿って3月まで走り続けるということ、また次期中計に向けて皆さんと協議しながら今後の藤田金屬が進むべき方向性を決めていきたいということを大前提として、皆さんに大事にさせていただきたいポイントは2つあります。

父の指針の踏襲となりますが、1つ目は「変る」ということです。世界経済に目を向けてみると、米中の貿易戦争、イギリスのEU離脱、インドをはじめとする新興国の台頭などが見られ、世界情勢も常に変化しています。国内の鉄鋼業界に目を向けると、人口減少に伴い将来的に確実に鉄鋼需要が減少する中、メーカーや商社が統合し、更にはそれぞれが川下のビジネスを展開し始めています。そういった状況下において、我々が日々の業務をただこなしているだけであ

れば、座して死を待つと同義です。私も去年までは一営業マンとして前職で働いており、日々の業務の中で柔軟な考えを持つのが難しいことは理解していますが、自らの業務を改めて見つめ直し、プラスの方向に改善していつてもらいたいと思います。

2つ目は、コミュニケーションを大切にしていきたいということです。前述の件にも関連しますが、新しい考えや柔軟な思考・発想には職場の仲間やお取引先様等、自分の業務を周りから見られる人、その視点が大事だと思います。上司や目上の人だけが指摘をすれば良いわけではなく、部下や若手も気づきがあれば積極的に意見交換をすることで、夜、飲みにいったりなど、そういった日々の中からコミュニケーションをとることで、職場やお取引先の人を理解できてくると思いますが、それがチーム力のアップに繋がると信じています。

最後に

今年度は11月末までに7件災害が発生しています。安全は何を差し置いても優先されるべきであり、安全が会社運営の土台でなければなりません。発生した災害からだけではなく、重大ヒヤリを含む日々の気づきの中から、改善した方が良い点を見つけ、変わっていくような職場・組織を皆さんと作っていただければと考えています。まずは今年度末まで、皆さん安全第一で過ごしましょう。

常務メッセージ



代表取締役常務
今井 雄介
YUSUKE IMAI

変化の一年で得た学びを糧に 次なるステップへ

あけましておめでとぅございませす。皆さんにとって平成30年はどのような一年だったでしょうか。この一年をあえて一言で表すならば「変化の年」であったと思います。藤田金屬にとっては、前社長が死去し10月より現社長体制へと変わりました。今期中期経営計画の中でも多くの変化を掲げ、実行に移していただきました。そして今年度を最終年度に、平成31年度からは次期中計に移行することになります。これらの節目の年として、会社としても内部、外部の環境変化に伴い、あらゆる変化を求められた一年であったと思えます。私自身も、周囲の環境や自身の立ち位置が目まぐるしく変化した一年でしたが、その中でたくさんの方々に出会い、支えていただきたから、多くのことを学ばせていただきました。この一年間で感じたこと、学

び得たことはしっかりと自身の心の中に焼き付けて、今後に生かしていかなければならないと強く感じているところです。

藤田金屬に入社してから多くのお取引先様とご挨拶やお話をする機会をいただきましたが、その中で特に感じたことは、藤田金屬という会社を本当に多くの方々に慕っていただいているということです。どのお取引先様に訪問しても快くお迎えをしていただき、激励の言葉をかけていただいたことには正直、驚きました。これは前社長の人柄によって、長くお取引先様と信頼関係を培ってきた結果であることは、多くの方にご来臨いただきましたお別れの会からも分かりますが、それだけではなく、社員の皆さん一人ひとりが、日頃よりお取引先様とのかに丁寧に、親身になってコミュニケーションを取ってくださっているのか、それが鏡のように我々の前に映し出されているのだと、この10ヶ月間毎日実感しておりました。社員皆さんには心より感謝を申し上げたいと思えます。

平成31年は、感謝の気持ちを持って持ちながら、「意図した変化の年」と出来るよう、一日一日努力していきたいと思えます。この平成31年が社員の皆さんやご家族にとって、健康で幸せな一年となることを祈念し、私の年始のご挨拶とさせていただきます。

役員 新年の挨拶

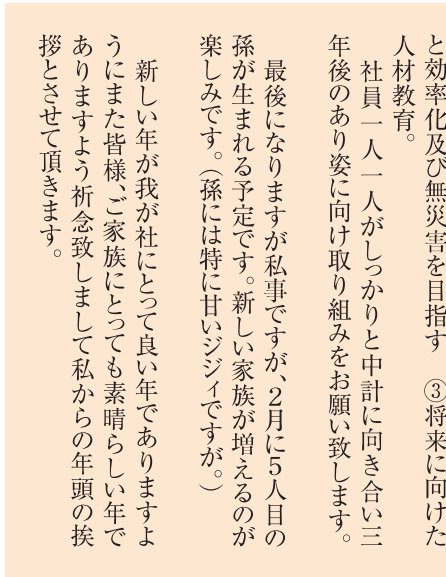


専務取締役
竹石 仁
薄板事業部長

■2018年..当社にとって悲しみと共に大きな節目となりました。若き代表取締役お二方の就任に伴い社業の揺るぎなきことを確信し、お取引先様との信頼を更に高め持続的成長に専心します。

■新分野と既存..わたしたち達の行動様式進化&深化で動き変えるべきことを問うて来しました。今後も業界間を結ぶディレクターとしての立ち位置確立を目指して行きます。

■2018(2019)に繋ぐ..「安全風土」・「最適品質・最適価格設計」・「相互成長」―「安全」・OSHSの真意を体現し、風土化することとは並大抵なことではありません。「日々ゼロ災定着」を起点に本質安全を追求し続けます。近道せず、着実に。「素材値上げ」から、「提供価値に相応しい価格設計」に移行し、すべての商流設計で「成約交渉力」を鍛え「適正価格/生活設計」を原資に次代投資を希求します。―全役員・社員が啓発し合い、事上錬磨でスキルと人間力に富んだ組織に成長させます。AI、RPA等をチームで理解せず、「5ゲン」思想に基づく変化点感度を成長させ、有効な設備・高度化ツール導入を企画します。新時代の入り口に立ち、次なる中期経営計画の土台を整えます。



専務取締役
池田 秀雄
ステンレス特殊鋼事業部長

新年にあたり一言、挨拶させていただきます。昨年は今井前社長が突然亡くなられ、忘れる事が出来ない年でありました。しかしいつまでも悲しんではいられません。これからは幹太新社長の下、全社員一丸となつて社業発展に邁進して行きますよう。

日30年度 ステンレス特殊鋼事業部の業績は上期の値上げ効果もあり、売上(前年比)110%、差益は販売量伸びず98%となっています。この先Ni安が気掛かりですが相応の収益は確保出来るかと考えています。

本年より新中計もスタートします。当事業部の方向性は①加工品を将来収益の柱とする為更なる施策を実施 ②AI・IoTを導入し自動化と効率化及び無災害を目指す ③将来に向けた人材教育。

社員一人一人がしっかりと中計に向き合い三年後のあり姿に向け取り組みをお願いします。最後にになりますが私事ですが、2月に5人目の孫が生まれる予定です。新しい家族が増えるのが楽しみです。(孫には特に甘いジジイですが。)

新しい年が我が社にとって良い年でありますようにまた皆様、ご家族にとっても素晴らしい年でありますよう祈念致しまして私からの年頭の挨拶とさせていただきます。



常務取締役
土田 喜一
管理本部長

社員の皆さんは希望を持って新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。昨年は今井前社長がお亡くなりになり、わが社のみならず鉄鋼業界新潟経済界にとつてもまさに「巨星墜つ」でした。そうした中でも動揺することなく堅調な業績を残し、お取引先に不安を抱かせることが無かつたこと、藤田金屬として恥ずかしくない「お別れの会」を執り行えたことは社員の皆さん一人ひとりの力を発揮していただいた結果であり、心から感謝しています。

新しい年は新社長のもと、次期中期経営計画を策定し、新たなステージでのスタートの年となります。

私たちは今、IoTやAIを用いることで起こる製造業の革新いわゆる第四次産業革命、待ったなしの少子化による労働力不足、働き方改革と、大きなうねりの中で対応を迫られています。このような環境下、管理本部は次期中計で社会構造の変化と技術革新に適切すると共に投資戦略を推進することによって、持続的に成長可能な体制を構築してまいります。

営業店の皆さん、管理本部社員と互いに連携を取り、一丸となつて前進していきましょう。藤田金屬がさらなる飛躍をとげる新たな一歩を踏み出す年になるという思いを込めて、新年の挨拶とさせていただきます。

役員 新年の挨拶



取締役相談役
松浦 康夫

あけましておめでとうございます。昨年10月より取締役相談役を拝命している松浦です。今井前社長とは伊藤忠商事の同期入社であり、42年余に亘って、公私両面で親密なお付き合いをしてきました。彼が闘病に入られた時期に前職を退任した事もあり、生前の彼との話し合いの中、藤田金屬でお手伝いさせて頂く事になりました。

7月に顧問に就任以来、会議への出席、支店訪問等を通じて役員社員の皆さんと接してきました。日本の鉄鋼流通加工業の中でも、これだけの取扱量・品種と多彩な機能を一つの会社として備えた企業は多くはありません。大きな強みです。また、オーナー系企業でありながら、きちんと組織として機能している事、しっかり人を育てている事、意見を言える風土がある事に強く印象付けられました。25年間に亘って会社の舵を取ってきたこの大きな存在がない今、役員社員一人一人が成長を続け、変化が常態化した市場で勝ち抜いていくしかありません。

私も微力ながら、これまでの経験を生かして、若き経営陣と社員の皆さんのお役に立てるよう全力を尽くす所存です。ご一緒に頑張りましょう。ありがとうございます。

皆様、謹んで新年のお喜びを申し上げます。

昨年は、会社にとって圧倒的な存在感があった先代の社長が逝去され、社長の交代という大変大きな出来事がありました。私個人としても、3月に前社長より自身の病状を伝えられたと同時に、今後は建設建材と厚板・形鋼の事業部を統合し、健全な事業運営を軌道に乗せたい旨打診され、非常に驚きました。4月より建材・厚板事業部として新たなスタートを切り、戸惑いながらも再建策に取り組んでまいりましたが、10月には新役員体制への変更など目まぐるしく変化した1年だったと感じています。

本年、皆様と共に注力すべきことは、中期経営計画の締めくくりの年として、目標をしっかりと達成させること。そして、そのことを踏まえた次期中期経営計画の作成と遂行です。建材・厚板事業部としては、「今まで取り組めていなかった分野やマーケットへ挑戦する」、「更なる機能や加工範囲の拡大をする」ことを主軸に、透明性のある柔軟で環境の変化にも対応できる強い組織作りを目指します。一致団結し、スピード感をもって目標に立ち向かいたいと思いますので、ご協力を宜しくお願い致します。



取締役
多村 嘉人
建材・厚板事業部長

新しい年を迎えるにあたり、皆様に謹んでお喜びを申し上げます。瞬く間の年末年始を終え、残る疲れもあれど、心機一転できたのではないのでしょうか。

旧年を振り返れば、これまでに自身も経験のないスピードで急流を過ぎ抜けた様な感覚で、いつの間にかまた次のスタートラインに立っているという心境です。事業部としてリース部門の再建策に試行錯誤しながら全員団結して挑戦し、その渦中に我社の大黒柱である先代社長を喪失し、回想の間も無く、新体制による新たな歩みが始まった年でした。

さて、新年のスタートにあたり今すべき事、決心せねばならない事を申せば、やはり新しい中期経営計画の策定とその確実な遂行です。我が社が10数年に渡り先代社長の強い主導の下、経営の根幹としてきた言わばエンジンであり基軸です。その間、各事業部、各事業所において困難、苦難の出来事が起こりましたが、それを跳ね除け、成長と成果を着実に掴んできたのは、これを社員全員が踏襲してきたからこそと確信しています。

本年中には元号も変わり、様々な環境や人心にも変化が訪れるでしょう。私達も、新たな経営体制の下、新たな目標を立ち上げ、それに向けて第一歩を踏み出す年にしましょう。



執行役員
高田 清豊
建設建材部長